

検証とちぎぎ3.11

東日本大震災「火」1年

携帯電話がつかない。「子供たちは大丈夫だろうか」。不安ばかりが募る。

大震災が発生した2011年3月11日午後、宇都宮市の福祉施設「高根沢町在住の職員加納美紗子さん(33)は、同町内の保育園に預けた4歳と1歳の息子たちのことで頭がいっぱいだっ

勤務先には利用者のお年寄りが12人いる。街の信号機は消え、渋滞の中を自宅に送り届けなければならぬ。「子供は保育園の先生が守ってくれている」。加納さんは信じた。

息子の無事を確認できたのは、大地震発生から約4時間後の11日午後7時ごろ。「バスの中で待っています。大丈夫です」。

情報伝達

保育士から届いた携帯メールを見て力が抜けた。保育園に着くと、長男が泣きながらしがみついていた。「先生も家庭があるのに、責任を持って守ってくれた」。加納さんは感謝で目頭が熱くなった。

「一斉メールがあつて助かった。親も安心したと思う」。那須塩原市黒磯中の市村正司校長(60)は、あの日を振り返った。

地震発生直後から、携帯電話はつながらない状態が続いた。「栃木県では通話の規制を最大90%かけた」とNTTドコモの広報担当者。一度にたくさんの方が安否確認の電話をかけたのが原因続々と保護者が学校に

だ。震災当日の規制は深夜まで続いた。通話規制は最大でau 95%、ソフトバンク70%。一方、3社とも本県ではメールへの規制はかけなかった。メールは効率の良い送信方式。「回線は混雑したが、比較的つながりやすかったため」(au担当者)という。

震災で活用、導入続々



保育園に長男と次男を迎えに行った加納美紗子さん(左)。震災時、1本の携帯メールで子供の無事を確認した21日、高根沢町宝積寺、陽だまり保育園

た。同校は緊急連絡網とする。子供を狙った犯罪が相次いだことを契機に07年、システムエンジニアだった同会の佐藤昭治理事長(56)ら元PTA役員が中心となり独自のシステムを構築。普段は部活動の保護者会などグループで活用している

システムはNPO法人「私達の子供達を育む会(那須塩原市)」が運営する。システムを構築。普段は部活動の保護者会などグループで活用している

安心届けた一斉メール

木生まれの一斉メールシステムで、多くの子供たちの役に立ちたい」と強調している。

(加藤寛)